

坂の町長崎から

<つぶやき>から<波動>へ

～長崎斜面研究会の歩み

平野啓子(21回生)



■たくさんの<つぶやき>から生まれた長崎斜面研究会 細長い港をすり鉢状の斜面居住地が囲む長崎市は、坂の町の石畳や夜景の美しさが観光資源にもなっています。しかし車が入らない細街路と狭小敷地で構成された斜面居住地は、車社会からは取り残され、住宅産業からは見放され、そこで暮らす高齢者や障害者は、福祉のまちづくりが進んでも、地形的なバリアを抱えています。

こうした状況に対して、いくつもの<つぶやき>があります。リハビリを終了した斜面地に暮らす患者の病後の回復の遅れや病気の逆行への、脳外科医を中心とする医療職の<つぶやき>、地形的な面から高齢者や障害者の生活への対応に苦慮する土木職の<つぶやき>、中心市街地を囲む斜面地から若い人が去り、人口の減少と高齢化の急進による街の力の弱体化への、商業・観光関係者の<つぶやき>などです。医療職の<つぶやき>は、脳卒中中途障害者の追跡調査と訪問看護対象者の外出状況に関するアンケート調査(長崎実地救急医療連絡会)で、大きな<つぶやき>として報告されました。それに呼応したのは、医療関係者だけでなく、建築や土木に関わる職種、福祉職、機械システム系の技術者・研究者などの専門職をはじめ、民間サラリーマン、斜面居住地の住民や自治会役員、行政職、大学教官など多彩な顔ぶれでした。『どの様に老いても、どの様な障害をもっても、住み慣れたところで安心して暮らしたい』という思いと、斜面居住地が暮らしやすくなることで、「長崎の活力を再生したい」という思いの実現をめざす“波動”となり、1997年10月、長崎斜面研究会は発足しました。

長崎で日本建築士会全国大会開催 同じ頃、長崎で日本建築士会連合会の全国大会が開催され、長崎の女性委員会は「斜面都市の光と影」をテーマに1フォーラムを担当しました。斜面居住地の課題を「交通」「福祉」「防災」「コミュニティ」「建築法規」の5点に絞り、検討会や実地調査やアンケート調査を行いました。大会では現地見学会とワークショップによって、課題の解決には建築だけでなく多くの分野の視点や考え方や手法が必要であるという示唆を得ました。これも大きな<つぶやき>となり、大会終了後、私



長崎斜面研



坂の町長崎では、足の不自由な方は家族が背負わなくてはなりません。雨の日は大変です。

現在市内3ヶ所に設置されている2人乗り簡易リフト「水鳥号」は、研究会の提案と多くの方の技術協力で設置され、みなさんに喜ばれています。

長崎斜面研究会の活動の変遷 現在の活動は、外出支援・生活環境改善支援・研修・交流・広報・修学旅行生の坂のまち体験や地元中高校への出前福祉講座の協力などに取り組んでいます。

当初は外出支援活動と研修活動が主でした。外出が困難となった高齢者や障害者を会員が送迎する移送支援活動や、年2回、青空の下でのイベント(春・秋まつり)などです。まつりは現在も継続しており、対象者・支援者・ステージ出演者の参加者総数は毎回300名を超えます。移送支援活動は、「ぶら〜り散歩」(不定期)へと改編し、4〜5名程度の対象者と10〜15名程度の支援者が一緒に散策やショッピングや季節の風物を楽しんでいます。研修活動では、行政と共同開催の講演会や関連団体との協働イベント、救急講習会などを開催しています。3年前より、メンバーや関係者の活動報告や斜面地に関する各種調査・研究の報告を行う研究発表会も始めました。

その他、生活環境改善支援活動も加わりました。移動手段や住宅問題で困っている方に対して、医療的・福祉的・建築的改善策の提案や住宅の改修、移動・移送機器の改修、福祉用具の提供や改善の他、階段昇降機や簡易リフトや可動式スロープなど移送機器のオリジナルな開発、障害の状況に応じて残存能力を活用したコミュニケーション手段としてのパソコン改修・開発です。最近では、「福祉110番」として、生活環境改善への相談を常時受付けています。

■突然の代表就任から4年、NPOへと衣替え 2001年6月から2代目の代表を拝命しました。初代表の栗原正紀氏(脳外科医)がリハビリテーション医療の修行へ旅立ったからです。あまりの突然さと荷の重さに驚愕の就任でした。新代表に不足する力は(業務や家庭の都合で参加できないなどそれぞれの事情はありながら)、その時々参加者の得意分野を活かした素晴らしい知恵や技量によって支えられ、会の活動は恙なく動き続けています。

そして、多くの会員の力によって、この度、NPOとして衣替えしました。「個」の高齢者や障害者への生活支援活動とともに「個」を包む「地域」へアプローチする新しい“波動”活動への展開として、斜面居住地に点在する空き家・空き地という地域資源を有効に活用して、地域コアステーション的なよろず相談所の活動を検討しています。(ひらの けいこ/有長崎建築社取締役室長、NPO長崎斜面研究会理事長)

●写真は長崎斜面研究会のHP <http://www.peck.co.jp/~nha/>から



ゴミを集める人は、ゴミ収集場所から箱に入れて坂を下り、ゴミ収集車まで運びます。



消防隊員は、消防自動車が入る場所から階段の上の火災現場まで、ホースの束を背負って坂を上ります。